
消えた第3ボタンの謎

二世

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

消えた第3ボタンの謎

【著者名】

一世

N4064P

【あらすじ】

時は平成。日本がポツダム宣言を受諾してから四十年ほど経った頃だ。

生徒達はいつも通り、午後四時ぐらいに帰宅する。しかし、その学校帰りに事件が起こる……。

その事件を解決させる為に、今、刑事が行く……。

(前書き)

(注) これはギャグ系小説です。そこまでギャグ感はありませんが、ギャグ小説です。

キーワードに刑事とありますが、サスペンス等の関係は一切ありません。

一応ノンフィクションです。

甘露煮が美味しい季節……だったが、もう冬だ。もうすぐで大福の時代だ……。

……私の名前は探原准事。十五年間、サスペンス事件に関しての仕事を務めている。

私は影のような存在。なぜなら影が薄いからだ。

私は子供の頃から教室の端っこにいた男だ。席替えをするときも毎回左端。いつも窓が私の存在に気づいてくれたことは、今でも覚えている。

そう、私は窓が友達だった。そんな親友の名前はういんどう・じりごりという。彼は今でも私のことを覚えているのだろうか……。

……そんなことはどうでもいい。先程から、事件のにおいがプンプンする。私の鼻もノリノリだ。

今日は事件が起ころる予感がする。

まずはあの学校へ行つてみようか。

名前は……天川中学校。日本でありがちな名前。岐阜とか青森とかにありそつだが気にしないでほしい。

では、潜入しようか。

時は平成。日本がポツダム宣言を締結してから四十ほど経った頃だ。

生徒達はいつも通り、午後四時ぐらいで帰宅する。しかし、その学校帰りに事件が起る……。

「アハハハーソレテサー……。」

学校帰り、生徒達は毎日、アニメやバラエティ・ゲームなどについて語っている。

「そんでもー、俺やつと神戸へ行けたんだぜ? いやー楽しかったわー。」

「おーおこ馬鹿かよ。俺も行きたかったなあ。」

「まあ話は後だ。早くチャリに乗れ。こぎながら話してやつから。」

生徒三人が自転車に乗り、飛ばしながら坂を降り、石がいっぱいある公園へ行くよしだ。

「あの子達の誰かが、事件のきっかけになるかもしない。」

准事は走つて三人を追いかける。しかしあつといつまに三人の姿が見えなくなつた。

准事は走るのが遅い方。常人の体型なのに遅い。端っこにいたせいかもしけない。

「ま、待つてくれー！私と同じスピードでここでくれよーーー！」

五分後、生徒三人は公園に到着。ブランコに座り、再び神戸の話を続ける。

「でよ、続き何なんだ？早く教えるよ。」

「まあ慌てるなつて。よーく聞いておけよ？」

四十分後……

「…………そろそろ帰らうぜ。俺、塾あるから。」

「羨ましいなあ。今度、オカソに頼んでみよつと。」

「俺も。」

……事件が起つる……

「よし、行くぞー。」

制服を着ていると暑いので、ボタンを外すその時！！

「うわっー！」

プラスチックの棒を折った感じの音が。

「どうした？」

他一人も尋ねる。何が起きたのか気になるようだ。

「ボタンが外れた。」

「なーんだ。そんなことか。」

「そんなんうわっーっていづらじゅうねー。」

「そりゃそうだけど……ボタンがどつかいった。ちょっと探してく
れよ。」

「しかたねーなあ。で、何の？」

「第3ボタンだ。」

「第3ボタンって何？おいしいの？」

「馬鹿、第2の下についているやつだろ？が。」

「まあとにかく、すぐ見つかるはず。探して。」

「仕方ねえなあ。探してやるか……。」

この帰る寸前、准事がよつやくこの場についた。

「はあ……はあ……何だよ」の坂……急だ……急ぎやがれ……。」

彼の目は既に死んでいた。十年ほど前の運動なのか、一時間かけてようやく公園の地に足をいた。

「見つけたぞ……小僧共……！」

「事件は何なんだあー……！？」

それから五分後、生徒達の様子は……

生徒達は体勢を変えながら探しているので、暑いも何も。制服は一旦、自転車のかごへ戻した。

「おーおー見つかんねえなあ。」

「結構探したぞ……？」

「もっかいボタン見てみろよ。本当はついていたりして。」

「ある訳ないだろーもしあつたら百万円あげのつて」「ジヨークかましてやるよ！」

自転車置き場へ行き、制服を見せる。当然のようすでそれっぽいものはない。

「そりゃないか。」

「あまり人を疑わないほうがいいぞー俺は嘘つかねえからー。」

「そりだつたな。スマンスマン。」

喋っている間に、もう空は暗闇だ。

「なあそろそろ帰らうぜ? 真っ暗だよ。」

「第3なんて、代理に使えるものぐらいいあるじやん。クリップとかおはじきとか。」

「いやダサイよークリップとかおはじきとか何軽くせざことんの?..」

「まあ落ち着けって。第2ボタンよりは価値低いからや。」

「第2は確か恋人募集中とかそういうのあつた気がするけど、第3は知らないなあ。」

「価値や効果とかの問題じゃねーのー俺は完全なまがいいのー。」

いつのまにか突っ込み役になつてきつて。しかし一人の生徒の顔は見事な真顔つぶり。何も面白くないそいで。

「まあ今日は諦めよう。喋つてはいる内に太陽が真っ先に沈んじゃつ

たよ。」

「……。」

第3ボタンをなくした生徒Aも流石に諦めようとした。……が！

「ちょっと待つたあ……。」

公園のすべり台からシーカル（笑）に登場。

「やこの君達！私は警察じやーなーぜー。」

「いや俺は全く……。」「あ、おー。そつても変な声聞こえなかつた？」

「あ、やひ……。」

生徒Aは幻聴を聞いたようだが、他の生徒には全く聞こえなかつた
よつだ。

それ以前に、やつき准事の声を聞いた生徒達。

准事は田の前に立つ。

「……おいー私は田の前にいるんだぞー何故私の存在に気がつかん!？」

いや……本文の上から三行田で自分で「影が薄いからだ」とかぼさいてたからだるー。

「しょ、諸君ー聞こえるか!返事をしてくれー」

「……えつ?」

「わたくしの声……あのキモ声と同じ声だー」

「どうから聞こえるんだ……？」の辺から来るんだがなあ。

生徒Cが指さす方向に、AとBもそこを見る。

しかしその指先には、准事の田先に向いていた。

「あ、危ねー!もうちよつとで鼻の穴に入りそうだつたじゃんー。」

「つーかキモ声とか言つた奴誰だ!後でぶつ殺す!」

「また声聞こえたね。」

「不審者いるんじゃないか?」

「不審者ってこんなによく喋るのか?俺は変人がいるんじゃないか?」

と……。」

「（糞が……言いたい放題いいやがって……特に横にいる老け顔の餓鬼一人！！）」

謎の声に不思議そうにいる男達と、暴力は決してしないと自覚（無駄な強調）した准事の距離間は、15cmほどであった。

「ま、まいい……諸君！こんな夜遅くからすまない。私は不審者でも変人でもない。刑事という者だ。あと……。」

「私の話をよーく聞いてほしい！」

渡 陽一と世間話をするときなのか。本当に距離がアレだ。近すぎる。

「び、びっくりしたーさつきの人、もうだいぶ近いといひところよ。

「私の話を聞いてほいって言つたよな？ちょっと静まひつ。」

「で、何ですか？」

最後に三人同時で返す。准事もやつと話を聞いてくれてホッとしたようだ。

前置きはよつやく終え、あきれ顔から真剣な表情に切り替える。

「ふう……じやあ無いますぞ。」

「君達、つこやつた事件が発生しなかつたかね?」

「じ、事件……?」

「事件つて、この第3ボタンをなくした件についてじやないか?」

「でもこれを事件つて言えるのかと……。」

そつ、たかがボタンが失っただけといつ。生徒達はとりあえずガッカリ。こんなのがススペンスらしくないと思つた方もいるのではない

かと。

「そつ、それだ!誰かがボタンをなくしたこと!…それも事件だ!私が解決してみよう!」

周囲に緊張が走る……。

「……ヘクシヨイーなんか寒くなつてきたな……。」

「夜になつてきたか?じやないか?」

「いや……緊張したのかな……（あの不審者の黙言で……?）」

「わあわあ、まづきつかけを説明してくれ。」

また緊張が走つた……。（のか?）

「ボタンをなくしたきっかけ……。」

「まさかBと共に旅行の話しだったんです。（いけね、鼻水出で
きた。何故だ……？夜だから……？）」

「まあ誰も来ないと想い込み、三人で公園へ行き、その話をしたん
です。」

「そこで時間をとり、話を終え、帰るときもよつと暑かつたので制
服のボタンを外した時、誤つて第3ボタンが弾き、先程お探しにな
つていたところです。」

「はい……。」

准事はその内容に深く考える。いや、考えた振りをしているのかも
しれない。

きつかけが安っぽぎるのか。しかもたかがこれだけなのか。

「え、んーと……きつかけはそれだけかい？」

あきれ顔 やるき顔 という構成であったが、今度はあせり顔に。

「すみません。本当にこれだけで……。」

Aは申し訳なむけに話を終える。

「……なるほどね……。（？）」

「公園で失ったのだね？学校で落としたところは絶対ない？」

「当たり前です。」

「おい、ちょっと不機嫌になつたる……。いくら私がしつらことは言えど、これは事件なんだ。」

BOY・今から幸福にしてあげるYOH

「よし、まず落とした場所を教えてくれないか？」

「これについて教えてくれないと非常に困る。わざ、その位置へ案内してくれよ！」

「んーと、確かにこの辺だったかな。」

彼は自転車の周辺で落としたと言つ。まあ帰る寸前だったからだろう。

「YOHの辺か……で、ボタンが外れた時、YOHからYOHの方向へとんでいったんだ？」

「どの辺……？お前等どいつ？」

「こや知らんよ。俺等はやつてのYOHにこつてなかつたし。」

まあそりやそりだよな。たかがボタンだ。

「なあ、もうクリップでもいいからそれで代理こしよつぜ？完全こ暗いよ。」

く、クリップだと…お主……中々やるじゃないか…これは無難じゃない。クリップなんぞダソーに普通に売ってるし…

いや、しかし、私は悩みを解決するいわゆる刑事だ。時間をかけてまで「クリップでカバーしよう!」といつ解決をして「一件落着!」なんて、刑事失格だ!

やはり「」は本物を探さなければならぬ。

「ふざけんな!クリップなんか」めんだ!」

「や、そうだよね!」は君の言つとおり、本物の第3ボタンを見つけ出し、ハッピーホンドと「」。

「じゃあどうする?また探すのか?」

「俺はもういいよ……。」

生徒Aは、挫折した気分で自転車置き場へ。

ま、まづ「」のままだと事件が解決せずに終えてしまつ。

「」は上手く誤魔化さなければ…

「じゃああの人を見ていない内に帰ろ!」

三人は自転車に乗り込む。

あの人には申し訳ない……。十円ガムここに置いてとくから……。

では、さよなら！

……その時！――

「うわっ！――」

生徒達が異口同音で驚いた表情が。

「おいおい、偶然かこれ……。」

なんと公園の周囲にある電灯の明かりが消えた。自転車もこいでいないため、彼等の姿は見えないほど。

そして准事はどこだ……。馬路で何も見えん！彼は透明人間になつたのか！？

「電気が切れたね。」

「（）しつかり管理してんのかよ？」

……またまたその時！――

「……その時だつた！――」

現れたのは准事だった。古任三郎のあのスポットが一つ。まあ上に懐中電灯が吊るしてあるだけだが。

つーか御前の姿は『無』なんだから、スポット照らしても意味ないがな。（笑）

「……いたしました！」

……お前はS.P.E.Cの当 紗綾かーーくら俺が戸田 梨香が好きだからって、お前のやの低す、見る声で言つてもまだなーーー」とちくじょーが！

「生徒達、事件は無事解決しますよ。（つーか の文章、何で筆者の馬路な気持ち）」

「ほ、本当ですか？」

「おこおこまだ天の声に構つ氣か？何度田の正直なんだか。」

「親に馬路で怒られるか。俺等帰つていいか？」

「いこや、お待ちください。最後に見せます。びっくつせます。相変わらずBとひだなー。今に見とひー

「ボタンがない……。まつまつなくしたというわけですが。」

「今日風が強かったでしょ？つまりボタンは風とともに飛ばされたわけです。」

「あーそつこいつともありますね……。」

私が最初に感づいたのか……。いやー助かった。

「問題は風向……。しかしです。あの木々を『覗く下さい』。」

准事が指すは、公園にある木。今は冬の夜。風が強くなっている。

そして風が揺れる方向……。

「『』から『』覗になると、ブランコが正面から揺れるほど……。」

「あのベンチを『』覗く下さい。」

そのベンチは四人が向いている方向。ブランコも彼等の平行の位置に立っている。

即ち、彼等四人が見る方向から、正面から風が吹いていることがわかる。（のか？）

「『』から見れば……左を見ると北となり……。よって風向は東からです！」

「よつするに……生徒達、そこから180度ぐるっと周つてみよう！」

反対側には、生徒達が持ってきた自転車が置いてある。生徒達は後ろを向き、そこから下の方を見ると。

准事は、吊るしてあつた懐中電灯を手に持ち、まるで浮かせているかのように懐中電灯を照らす。

「ほひ……あつたーあれですーー！」

三台並んでいる自転車の奥を照らすと、光るもののが一つ。

「あれでしょー? 第3ボタンとこいつものはよ。」

生徒Aが黙つて自転車の奥へ行く。そして豆のような物体をつっこみつけ出したのだ。

「あつたあー……」

「……ありがとうございます。確かに僕のものです。」

生徒Aは、すぐさま第3ボタンを付ける。感触はそのものだった。

「よかつたな。」

「これでようやく帰れるぜ。」

生徒達は、准事の居る場所の少し左側に一礼した。

「どういたしまして。(あれ……どう拝んでんの……?)」

「いやーやつと見つかったなー。」

「感謝感謝。」

「けどあの天の声、何処で喋っていたんだろ。本当に天からここを

見物していたのかも。」

「……これで一件落着だなー。」

見事事件を解決できた准事。かなり感激だそうで。

「上手く誤魔化せたな……アハハハ……。」

ん? 今なんと?
.....?

「いや、つい子供達を歸らせることができた……。」

ゲラゲラ笑った後、彼は服のボタンをとめる。

「私の代わりがあつて助かった……。」

卷二

雨が降ってきた。そして雷も「ロロロ」と音をたてて鳴りだす。

「……おこびうしたんだ。何故今だけこんな静寂であるんだ?」

「……まあ簡単な説明をしようか。」

まずは生徒Aの第3ボタンを探した。しかしどこにも見つからなかつた。

彼等は嘘をついていたのか、本当に見つからない。むしろ風で飛ばされたのではなく、土竜に奪われたのじやないか。

どうしようかと考えたその時、私の上着を見た。

それには刑事用の服装。そして偶然にもボタンがついていた。下を見ると……。

そり、第3ボタンがあつた。

まるで商品のおまけのようになっていた第3ボタン。私はそれをす

ぐに外した。

次に木々を見る。今の風向は東からだと判断し、風の飛ばされる方向に、私の第3ボタンを適当な場所に投げた。

そして私は格好つけてスポット懐中電灯を吊るしたわけだ。

用意が出来た後、投げた方向へまた探し出す。十秒も持たずに見つける。

外は真っ暗だったので、生徒Aも私のものとは気づかないだろう。

日が昇つた朝の頃は 。

（翌日）

昨日は辛かつた。久々に刑事の仕事したけど、かなり疲れるなあ。

といつわけで、

「……刑事……辞めました。」

「これから見えない一般人といつとりえのない人間として生きていきます。よろしくお願ひします。」

まあ別にいいが。

人間を辞めようとした准事であった。

その頃、生徒Aの家にて。

彼は飯と風呂を済まし、自分の部屋で勉強をしていた。

「あーあ、テスト近いと勉強三昧だから困るなあ。」

「それにしても、あの謎の声は一体何だつたんだろう。」

今日の公園での出来事をふと思い、椅子から立ち上がる。

「……でもあの人のお陰で無事に戻つたんだよな。」

「彼に感謝したいな。」

制服を見、探してくれた人を思いながら微笑む。つーか、ボタン一つで感謝しなくてもいいだろ。

そして第3ボタンを見つめた時……！

「……何これ。」

「……これ第3ボタンじゃない。」

暗かつたせいなのか、何にも見えなかつた。ただ、感触で第3ボタンだと感じたんだ。でも……。

「これはおはじきなのか……？」 こんなに上手く改造したおはじきなのか……！？」

表はツルツルじゃない。模様がある為、爪でこすつたらガリガリ（？）いつ。

「あの人つて刑事つて自負していたよね……」

「刑事つて何なんだ……？」

「あ、そういうえば空を一時間ほど見上げれば、嫌な記憶が忘れられるんだつけ。」

今度はカーテンを開け、窓も開け、星空を眺める。

「嗚呼……星が……綺麗だなあ……。」

目から滻のように涙が流れていった。感動したのか、あるいは悔しかったのか。

次の日の朝、彼は上を向いて歩いていた。

「嗚呼……甘露煮食べてえ……。」

甘露煮が美味しい季節……だつたが、もう冬だ。もうすぐで大福の時代だ……。

完

(後書き)

この話は、実際友人のボタンをなくしたことがきっかけです。刑事はオリジナルで出しましたが、それ以外は本当の話です。外が暑かったからなのか、いきおいで第3ボタンを外したら、弾いて飛んでいってしまい、30分ぐらい探して、見つからず。そのまま場を立ち去つたことは忘れられませんね。あいつももうちょっと気をつけて外すべきだったなあ（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4064p/>

消えた第3ボタンの謎

2010年12月10日11時29分発行